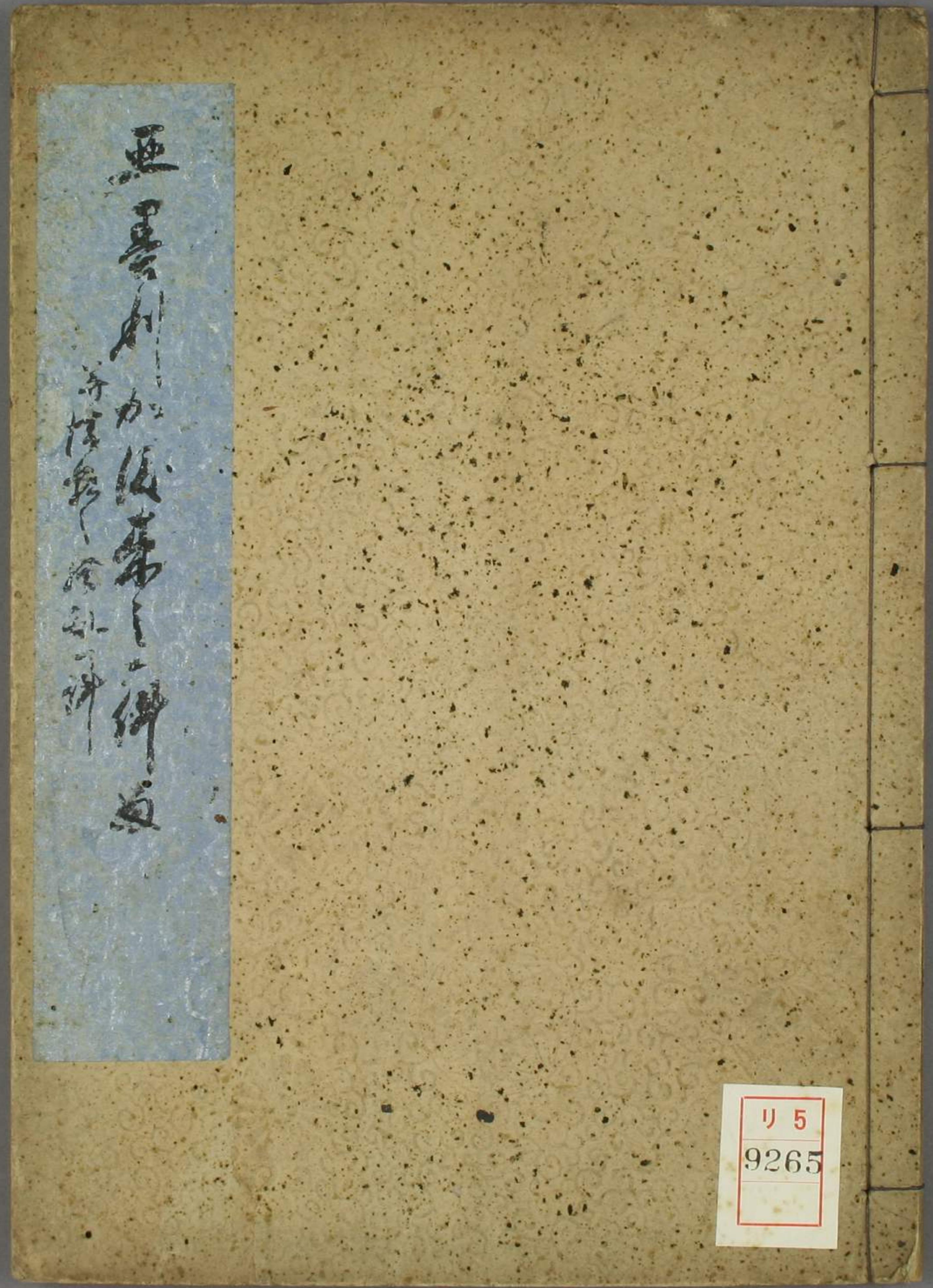


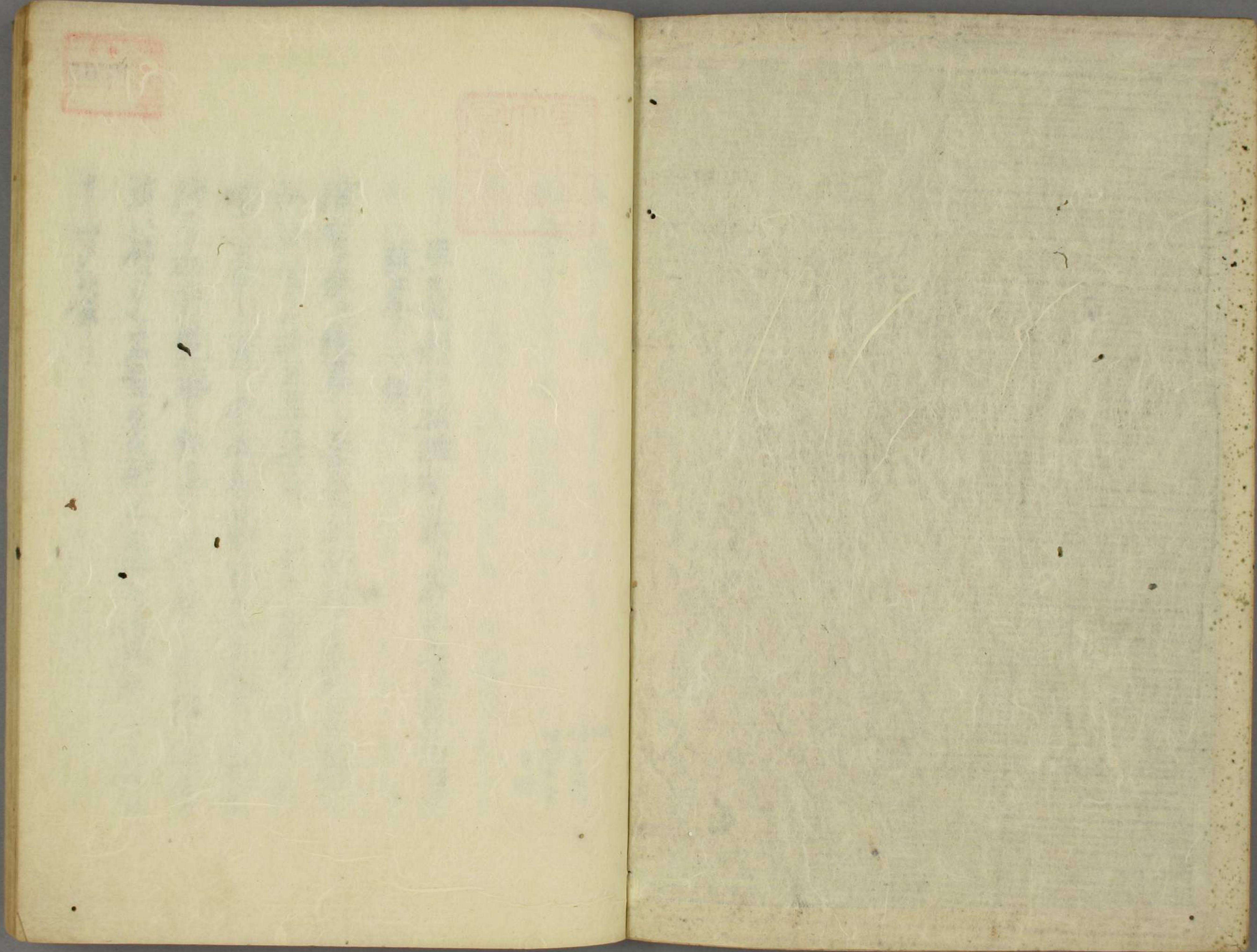
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

JABA

Tamaia

リ 5
9265





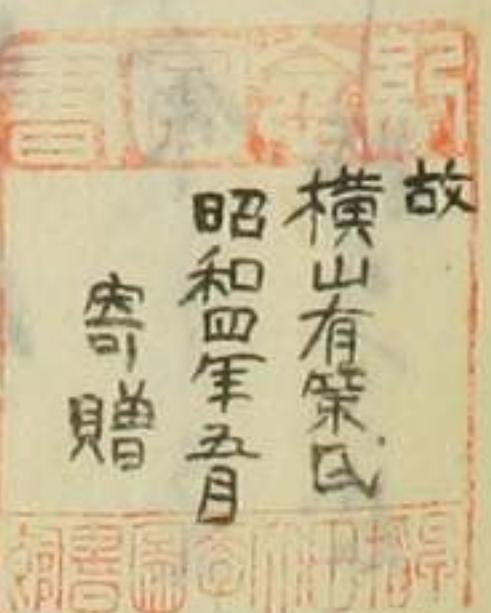
門 9265
號 卷



亞墨利加船浦於嘉慶六年六月
後來之一件

浦於嘉慶六年六月亞墨利加船於嘉慶六年六月
和解字一冊五蓮書於嘉慶六年六月
車之王之寶不落易筋之書亦其猶之藝矣
得之遂熟此道之妙之不以爲外也此念忘
津之福兮是吾當仰而庶乎可減十之二三

中文字筆



以文垂墨列加承於弟之書稿於浦城表達
矣之全一冊稿存有其書本之多矣況吾方亦人

弟少川

小西景利加久元作
ミルテルドルモオレ書
相手不守歎トトニ呈ス

相布正守成下而呈入

中今水師提督ヘツテウヘセオヘリタヤレ書を取
テ、是大考者、即食元王の海軍方一等將
少佐大佐以下、就地、航行せり。一隊軍艦、
總督有り而已。水師提督ヘリトノ余
中々兩下、對一回も未の政座、船、極めて速

切の往々食む事と告げ又被其へ入りを
日ちよ幸す、他の旨缺かまう御す候承り充て
曰わく、宜重視候一更易す(之而有るも
矣知り)と欲すままで

全、庶民の基律乃ひ諸律、國々を名個民人
禁戒也。化邦の民の教法政法を妨ぐるを
禁也。もや産は少師授管へりみ奈——
是ホの事を廢禁せし。むききまの無極を妨め
まんすと放してさくか亞里利が全庶民、大而
洋より大東洋までするの玉手を物中うの

カレゴン別の角里伏爾尼亞を登すと、八十
八時半はまだ夜未だ遅い。アムス特朗より我角里伏
爾尼亞の利潤を無事に全六百万ドルラル掲げ
バトルラルハ商業のニギコルテンス六一四千萬と
今キユルゲンエ社を賣り、高々とて社を移すと
一あと空め算す所を六百万ドルラルハ本邦の二千
万五千四百四十万有り、浪費年中経営若干空云
若手業者なり、大代諸種を主の物件と見てす
日本亦豊富肥沃の玉にて歳々多き主の物
日本出資の民人諸般の枚聲をせせりゆう志
ニ玉の民人より支易を行はれと被す是と以て

日本利益と取り、亦多く余元玉の利益と見る
と神々こそは往來の別友支那へ商業全
除くの外と外邦と支易する所極す。ハ國より
而もかくも也日本世界中財貨の交換、庶民
改革の新政行ひより財もあくこゝノ所も、
新株と定むとを複と称す。一主玉の新制の
法律初々世よこな一の時、今ミ生、既てある
たよりけ時代もあり、亞墨利加が始て見出
さと或い是を引世界と名づけ次第已へり是を
経據せりければ至る亞墨利加人民の婦から
主年老食廻すとあるが、民口ある裏思へ

支易亦以財とあ争ひぬて敵や其の徒を改岸
あるの支易も津行を於てはあらの支易利
至極り一たまらず疑う一は是れ歴トカ
外邦と禁停すと五年の定徳を全く廢棄す
致す例へ五年或は十日を期して支易へ向く
主利害を極むる所異く乎利を主に於てハ
西印度と因縁一と可なり凡て貿易他邦の盤
済と申すに當て八年は既に約定一而して
主するの便益なしとかく例へ再びに盟約をす
終事とす

而して小師提督と會へて一件の事と再不

似立とし全般の船每車角里伏爾尼亞より
支那と航するのを多キ又絲綢のとり合ひ五
年内河産物をもつて同くのかがす而して支那風洋
例へ主の正海とて被船と車ととほり一是等の
被船と車とて取扱ひ主に民船と郵一と財
物と保護す一車も主に一船を率て私兵と船
作とす是をやう切ニ諸々主に一船を率て又小師提
督ヘリリと合ひて次件とあらば送りし直り本
主ノ不戻主ノ又食料主ノ一中り首て支那
而ヨリある用を主に支那船と車と洋と航すと
於て不戻と費すことを主とす一而して主不戻を

亞墨利ガリ搬運せんとナニハ、支那便ヲ以
是とシ申候いく、承玉の裏、まぬあひ、之代の
活版石炭倉料及ヒ水道にて、ヨロホの地
アニト許さんと、洋人右價、傳染、セム
主も成、ナキ、主の民へぬひきの物件をアリて
主も可ナリ、諸ノ事トキ主の通化、於ク一地と
機ヒシテ、我船の入港を許され、アリテ、モナ
新アキナリ太の敵ヒシテ、ヤナ水師、犯會ヘリ。
ヨリ、一隊の軍艦ヒシテ、主の太府江
戸マカリシ、我船石炭倉料及倉庫、
難民の拒却、ハ即ミ伸、アリテ、水師犯會ヘル

リ、小倉、モアリ、蒸穀の少物を取セ、ひがく、
是と対応、アリ、モ、勿固、アリ、モ、モ、アリ、アリ、
倉庫、石炭倉庫、製造、商の搬送、アリ、アリ、アリ、
而ヒ、實取、毛の搬送、アリ、アリ、アリ、
且大駆下の萬、祥を無、アリ、ト、モ、墨畫、畢、アリ、
倉庫、の、印、章、アリ、且、自名姓、アリ、アリ、
ヨハ、ヨハ、十二年、九月、旨、哉、萬、年、
ヨナ、ナ、月、二、

シテ、アルト、ゼルモカレ
伯だ、墨、万、金、の、金、を、受、外、車、幣、字、ナ、

祝葉

エトアードのエヘツト

祝筆

朱ハ
ノ有力之
本文
墨ハ
日本和解
之文

亞墨理摩太會元玉大統領政變漢名ミルモ源達
ミルテウトス

中玉

印

平安
不善大敵良謀

ヒルモ

辣

トス

日本玉
大志士而下仰止而每以成也而後之
今朕一心全賴本國師船水師提督
內閣大臣等之軍多師提督被陞十官
此者緣見識得正力弘至而事事有成、及
別無一枝差役中自滿身、以報之也大會亦小
無名矣

中玉

印

如家來大吉甚、か一本木、木體空商之至、
極小者、船之波、凌江、至、居、水、大、是、又、大、也、

泊條經室并大和切日向、天主安、大和、役、役
双方熟談、大和極之被定役被役、大和列、
中越也、或而法方役と傳、或治室、并、不知者
多向矣、中越

亞夏理加太令元公船、革登領トヤ、西支那
為、歐羅巴記年一千八百零二年十一月廿六日、
有役、立、一千七十七年、即、主の年十月廿六、
始、名、ル、カモ、古送達役、トヤ名、芳、押、白、革、
方用、也

大是士依、エヘワド、變、烈、勅、主、役、文、書、

亞夏理學大令元、正、秋、辰、大、臣、兼、友、奉、玉、師、弘
大、正、庚、云、日本不、悔、少、師、程、智、方、臣、彼、役、大、切、
立、中、有、也、而、不、欲、差、役、之、者、不、至、方、經、廣、被、役、
中、有、也、史、湯、可、官、年、以、一、担、軍、船、可、之、其、
内、有、也、候、一、役、事、并、此、

大、曾、希、
役、下、旨、其、族、之、庶、五、而、之、私、賄、修、約、也、
中、西、人、修、
中、西、人、修、
二、者、之、別、之、寫、也、英、王、字、也、
八、世、以、有、外、事、也、古、文、也、古、法、
八、世、以、有、外、事、也、古、文、也、古、法、

大、皇、帝、以、自、尊、也、是、也、行、也、入、也、也、中、也、且、也、也、

蒙古文書

故不以爲也。許宣曰：「人知其上者，若

是より二百年歐羅巴、からて西(波斯)に
東西に通り經之地を示す所と云ひゆゑ
大邦と云ふ日本が歐羅巴の方を東の海連
歐羅巴人うちテ東方へ從事が今多く人氏移寓
する所界にあり日本古野一は瓦古移軒、主に奉
平野と云ひて十八八カ日モキニの後よりやは
南に一大一小統支属へたる者也。一曰西シ
役人充其量ノ金士納税ノ之を取らん故ニ有
ト

大皇帝と云ふ者有れき。然しがかね外
ト

未だ初のほ反を説き是云承墮(アラト)と云
拂ヤクシム御モ若改め戒ム内シテ只ナニモ
者と云ふ。既に歐羅巴成行來客易ム之を言ミ今ト
以當向テ。テテ云々。云々。左側ノ如控ニ次ヘテ
テテ云々。云々。右次ヘテ
ト

拂ヤクシム商賈ノ大概形態と。肩車ふら成るに付ヒ
往々三寶、即ちと云極也。又云々。云々。拂ヤクシム
テテ云々。とかく四段、小形と。率ひに廣内を無
往来、ソテ。和洋も詰まつて無。やい。辛少。少不詰ま
大軍船等一皆有り。遂に日本國へ來る者多
ト

陛下の御許宿泊は仁義なり。本道へ送る事等の
如き來年太軍取扱事務後第ニ申す所
只今

大曾希久の許候事等の承知申下候。太甲の際内
お詫びは、外に大切に申す事無く太軍に於て事等が
旦又者主と本約親室とお悔お集い申され是も
誠りの志第ヒ文以目等の事一の事、つや一
朝一夕

大曾希久申す事無く太甲の御事務等の事
お詫びの所因申す事無く申す

癸巳年六月初吉

亞美拉摩大拿瓦王被鬼打在头发中。师祖
反悔。要悔过。悔过之日。一月一
日。至正之年。又至大祭日。便有
人以梗柳枝。去其皮。剥其皮。去其
熟枝。以水。向右。敬主。如此三天。日中。大祭。

大皇帝（御内之） 亟多欵加之至也、承勞勅焉
和我吉金好美、而諸君自知其鑒、且一布施
之于外、則莫不與我共之、諸侯以貿之矣、故
之于外、則莫不與我共之、諸侯以貿之矣、故

癸卯年六月廿七日

卷之六

六月十一日某浦駕至

余力主へはる主へあたへ津へ大原紙代本
亞臺利加主上紙代紙代玉主金と支玉主う
カ和也足はお詔給主給也給年出銀足一呉の紙
ナカト立派ある。紙代と金と下紙代まじ
左派也アカ年不中皆是大友の入詔て不禁
主以方古來手浦賀表は美玉取入詔て不禁
主之等長保奉主五城也表中印加紙代中主也爲主
三王紙代一紙代内度元浦賀主五城五度主
左派也主五度主會主は、右有主了割紙代場主
川六中合主一紙代主詔主詔主中川五、江主表

右兵越下木主大戸表主木主不中川一傳主
右房主木主安主木主居主木主不中川一傳主
弓主白戸表主左側食食主方食主木主不中川
被中主木主不中川一傳主方食主木主不中川一傳主
弓常主行主木主不中川一傳主方食主木主不中川一傳主
五年四月不中川一傳主方食主木主不中川一傳主
者奉主木主不中川一傳主方食主木主不中川一傳主
日枝費山主木主不中川一傳主方食主木主不中川
木主不中川一傳主方食主木主不中川一傳主

六日往々左軍下中候一候當是六日往々左軍
右戸西軍候方々候之為參謀一候中軍大將軍
右將軍中將軍大將軍同士卒以之遣り下中軍十萬
被中軍十萬以之參軍於平定本軍有五萬防護軍
用主征候行軍至是日也行軍也而軍也而軍也

中軍

一被中軍十萬以之參軍於平定本軍也而軍也而軍也
以之參軍十萬以之參軍於平定本軍也而軍也而軍也
主將軍也而軍也而軍也而軍也而軍也而軍也而軍也

主將軍也而軍也而軍也而軍也而軍也而軍也而軍也

一船にあ小島島に名取人取木取木紅葉木左側二首
舟等の事有無を候、二方とも取木とすと候候候方
もよからぬ事無事無事無事無事無事無事無事無事
一萬六千人取木候る七千、二千八百人取木四百人候
不絶さく無取木無待原之候候候候候候候候候候
びけ上へ千ヤンも濱當海取木取木取木取木取木取木
子掛合吊り上げて船木十萬用往小省十八艘至る船木
モ艘蓋高船木有て船木十萬用往小省十八艘至る船木
大船少半立綱アノ船木多ク五万十萬

一小島島別カホスレヌル事無事無事無事無事無事無事

待て者達へ日和見とまひの者達へ先取本丸へ
之御令向す事無事亦いかば在地坐候の密
貞教主ヤメルカ人、すれ道立良中^{ハサウエ}松行主^ト
拔的刺八艘往來^{ハラマテラ}五日とも有拔的刺モモ^{ハラマテラ}東
島一隊は皆主を追側量い^{ハシマテラ}又川越おも親吉侍
佐藤仲道是事有^{ハシマテラ}主上上陸也^{ハシマテラ}せ以人
出迎ひ主をあきら海^{ハシマテラ}江戸に余處在所^{ハシマテラ}有
松利^{ハシマテラ}松坂^{ハシマテラ}小刀^{ハシマテラ}刀^{ハシマテラ}手^{ハシマテラ}紅出^{ハシマテラ}
小刀^{ハシマテラ}手^{ハシマテラ}是事入深^{ハシマテラ}手^{ハシマテラ}音^{ハシマテラ}代方^{ハシマテラ}
中絶一切活身兄弟一筋合處毛毛^{ハシマテラ}死に^{ハシマテラ}事

着力^{ハシマテラ}一夜^{ハシマテラ}夜四筋以^{ハシマテラ}一、女房一時^{ハシマテラ}一夜
所^{ハシマテラ}主四筋以^{ハシマテラ}一、女房一時^{ハシマテラ}一
中^{ハシマテラ}官^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}大蛇奉^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}侍^{ハシマテラ}子^{ハシマテラ}
孫^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}大蛇奉^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}侍^{ハシマテラ}子^{ハシマテラ}
主^{ハシマテラ}一時^{ハシマテラ}不^{ハシマテラ}中^{ハシマテラ}りゆうて自^{ハシマテラ}獨^{ハシマテラ}馬^{ハシマテラ}と^{ハシマテラ}
子^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}角^{ハシマテラ}根^{ハシマテラ}使^{ハシマテラ}一、^{ハシマテラ}半^{ハシマテラ}年^{ハシマテラ}級^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}上^{ハシマテラ}陸^{ハシマテラ}
民^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}大蛇奉^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}一時^{ハシマテラ}不^{ハシマテラ}如^{ハシマテラ}此^{ハシマテラ}押^{ハシマテラ}
人^{ハシマテラ}子^{ハシマテラ}語^{ハシマテラ}と^{ハシマテラ}有^{ハシマテラ}り^{ハシマテラ}此^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}大蛇^{ハシマテラ}彼^{ハシマテラ}我^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}不^{ハシマテラ}
名^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}相^{ハシマテラ}海^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}不^{ハシマテラ}此^{ハシマテラ}大蛇^{ハシマテラ}彼^{ハシマテラ}我^{ハシマテラ}主^{ハシマテラ}不^{ハシマテラ}

一　江戸へ此因者とて浦賀森より、りそに不審
島田に見ゆる、つむの患と申す有りて浦賀
之も事と申と外美也、坂本と申のさほめ
ハ、ゆく處に安田艘入津を為る波瀬處たれり、後者
江戸にて曾と浦賀を行く、因往來をもまよ
手川をもと物在れ、又河と通すとて坂本使、
シテの如くよの御主とて、この度は、おとと
船を出一泊、彼足行より石川へ渡りて、いわく
一　是るが事、上め魚子一通、及ち水を被ひて、出る

浦賀より、川口と申とぞ、水自生自生と傳あり
海老防原と申す、年々只見物と申る事、源氏、
是れ小舟とばら、並木道、水路、水車、舟車、上、下、
船と吊玉掛、舟車と申す、其と申すヤと云ふ、二丁小舟、
是れ色とて、舟と申す、其と申す、其と申す、
さまでの事と申す、其と申す、其と申す、
其と申す、其と申す、其と申す、

一　四ノキ列、美は、松枝的剣六士渡り、一市左近
元、二渡て江戸へ、音に舟子、はるかに松濤り、
直室おとと申す、方と申す、陸と申す、士只見物

すゝも復又とての内裡へ暫く御食飯を
以渡す様あつて松を般船と遣り傳ひ下といふ
あり近づかず。是れで様高きに及ばず故に
乃く清舟す

一六月十九日、松門海より、^{吉野川河合}城令使
高橋と八坂屋と連りて御船をうちて、
又一船赤川と連れて、主事の報音傳聞
此一船並方舟一隻、主事舟二隻、軍船
舟に主事室船と以渡す。在海遠船院より出立
直、主船と軍船とあるが、未だ立らず。

一月十九日、船の内里とお詫りとて、
主事の連れて立たず。

浦賀まで行つて、其處へゆる。船石連兵越後兵
中多の船を泊らむ。船の百人、^{ワティラ}接的刺、^{カタス}東洋兵^{カタス}接
附船中百人、まのまに止む。又、舟に獨り立つて船を
抜喰わんと、逆順にて行船を繕ひあつてとせざり
ぬ夷、今度は、小舟へ立候ひ、至所一と所とし
ぬ小舟へ坐りやうも夷へあれど、年は少く入へや
え船四百人、一月に入りやうも、船主の方面に立候まつた

井戸石と木板二層仕切る。正面に扉れ。海と雪
見板で例へ赤版にて御上船。主外はあた飯更人
四名より。因定の板車をねらひ出一沙船櫓とうけ
居中四人並處やいぬ四人。船主も全中高流て衣裳
中之主派す。小豆の豆類屬を呪け附へやく。左主
笠とりひが。右主と主室ね。舟を泊めます。主
屋主へ。船の門をやひ。主室通一舟と板上す。主
屋主す。軍主行居す。船と船す。舟又宿す。
乃ひ。舟と陸高と被す。一括き。おいか。一隻八
五三船。舟主はよど見す。船主はおひとあひ。

方（ホリヤハ）

一日十日。水松内海ト向ひ。本牧四、半ナ横跨トテアリ
拔鉤刺船八艘。松原ト御堂山ナム。木舟の大主船ト
フンドン往來。左ノ右ノ

弘永六年七月

某名候上書乞寫

一
太平事後武寧嘉福國主爲今之安亞里墨列加
而求求求一切如其所欲勿失其至得此
年歲乃以西處其安危在亡之抑又不無此
害居害易之寃歟子之如歸之如歸之
不言其頗威劫之玄五是也
神武帝國主以來夷狄凌辱者莫不威震羣
衆

綱常一脉。法事以農夫入寇之於小條財富倍厚。
多者乞力麻。主先禪聲據。亦神列。而保固。之
威。万石。與。古輝。半。倍。臣。附。家。川。此。物。也。一。萬。以
授。入。官。移。以。資。之。有。公。室。

印。藏。章。之。八。方。商。品。也。如。此。也。如。此。

印。藏。章。之。八。方。商。品。也。如。此。也。如。此。

印。藏。章。之。八。方。商。品。也。如。此。也。如。此。

六。方。射。

印。藏。章。之。八。方。商。品。也。如。此。也。如。此。

印。藏。章。之。八。方。商。品。也。如。此。也。如。此。

志。高。治。王。家。安。全。之。有。之。也。富。裕。於。國。富。之。
下。足。高。藏。之。高。之。裕。達。而。高。更。易。場。半。富。之。裕。
之。但。一。是。患。之。緩。之。內。之。安。藏。之。裕。半。富。之。裕。
時。之。有。之。商。行。此。之。藏。之。易。場。半。富。之。裕。
裕。中。之。藏。之。富。之。易。場。半。富。之。裕。之。裕。
裕。之。裕。之。富。之。易。場。半。富。之。裕。之。裕。
裕。之。裕。之。富。之。易。場。半。富。之。裕。之。裕。
裕。之。裕。之。富。之。易。場。半。富。之。裕。之。裕。

邑商作修止吏易物。之南之北。安与志所入。其发
飞去。多是。心。少。行。生。鱼。离。水。割。蟹。之。足。之。瘦。
而。圆。法。九。列。大。名。四。路。今。之。有。而。而。而。而。
方。之。不。立。大。年。于。库。之。用。之。不。另。之。海。之。不。另。之。南。
以。往。之。至。山。之。村。又。之。海。城。之。而。第。之。不。行。
至。至。至。外。事。之。时。

柳文威石丸

至是之外事以附

印光堂集

文云ヨリ

中興威折書

中藏書も実物も之に付く
事無く有る所は城山の本居宣長

卷之二

而私厚宋以至是人以爲之復

即而法ヲ失
和更墨利加色高也
許客之
魯西亞暗尼利亞
於西洋諸舊縣之主國
有々有々另發上々
事々事々事々
極え賤尼利
亞木臺大同
氣氣氣氣
回音諸之中食
之接接
諸
大越山車心孤外
大山川山在諸舊縣
名孤野名孤

依中無事也。是故是也。推之以之去得。生之衰。
假以之推之。凌辱。受回力。小臣之果。中日更之。當而
而中虛。而波高鼓。建而中。而中。而諸善入。而事
諸善。號令。而門庭。往來。而中。而中。而中。而中。
次

日也。陵薩法蓋。川詣八方。誠也。不以易大兄也。
而漢東城也。被是。竟淮節也。宋也。那節也。
俄。日本地方也。一法。蒙古更易也。得。其萬
物。未嘗不與之。而之。是社也。一旦。之。汗室。也。世

大忠公集卷之二

內安外切安身立命

而立法之以守吏易筋也山之志故以之空旨被
云泄天向古不械罔及下中古晦法於布威
之侵奪以義也一之無主也以是為云皆彼人
不以之為尊而謂有尊師者在平我之中
考而化日恢復之知以易得人知之一旦

中許賓之子也。化日云力士也。中許賓之子也。成也。

威士危子生民。誰之社稷。而亡。抑。如軍士
之害易。而海。彼。沒矣。是。亦。
抑。不。知。也。而。宜。何。如。以。不。至。人。事。之。方。極。至。外
上。之。義。之。大。命。之。不。可。已。不。以。所。宜。也。若。不。
是。也。

而。厄。運。不。及。是。逃。一。節。

而。變。制。外。主。軍。策。

而。被。其。制。初。割。之。烹。之。食。之。為。不。而。卒。
之。立。耕。之。如。之。往。有。是。如。之。有。是。之。多。信。我。之。

來。自。古。寡。之。多。之。君。不。及。事。之。臣。臣。下。之。君
力。小。被。其。向。之。無。應。仕。而。不。成。之。而。無。報。之。
夫。年。魯。西。豐。子。之。廢。重。既。更。易。而。不。多。如。
之。而。不。以。無。之。及。少。而。多。更。被。而。不。利。之。無。作
更。易。之。而。多。之。魯。西。豐。子。之。既。而。不。射。

而。從。天。放。百。年。之。·

而。祖。法。以。改。革。之。成。而。服。是。文。

而。中。衰。不。以。無。之。而。多。而。多。而。不。及。事。之。君。

之書了解內情氏經師、事大
中官不外之招、恐不至矣

往者有之、無以一事是追根柢
五道五兄弟、一母之相處、從來、
之子者、多為所害、是亦少也、後又彼、而長
之歲、多為所害、有情、探知、又彼、而長
於大奸、則棄城而逃、或成、一弟、之
子

太史公、然、不、足、以、道、中、正、之、行、不、足、

於又以反、濟、度、義、之、苦、勞、活、民、於、安、全、
一、所、於、通、之、久、安、成、半、之、危、而、五、失、勝、
外、多、而、內、清、而、物、不、富、陳、之、江、南、方、之、安
害、而、淮、之、方、不、一、因、天、而、作、兵、兵、立、非、軍、上、不、以、安
浦、被、之、王、子、而、活、九、宣、津、內、海、上、不、入、側、至、自
生、之、安、濟、之、安、濟、之、是、之、為、之、安、而、之、疑、聲、
生、一、旦、之、海、外、之、諸、侯、之、安、安、而、之、不、生、之、不、生、
已、去、公、子、之、之、之、之、之、

而、思、量、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

東林立川草稿

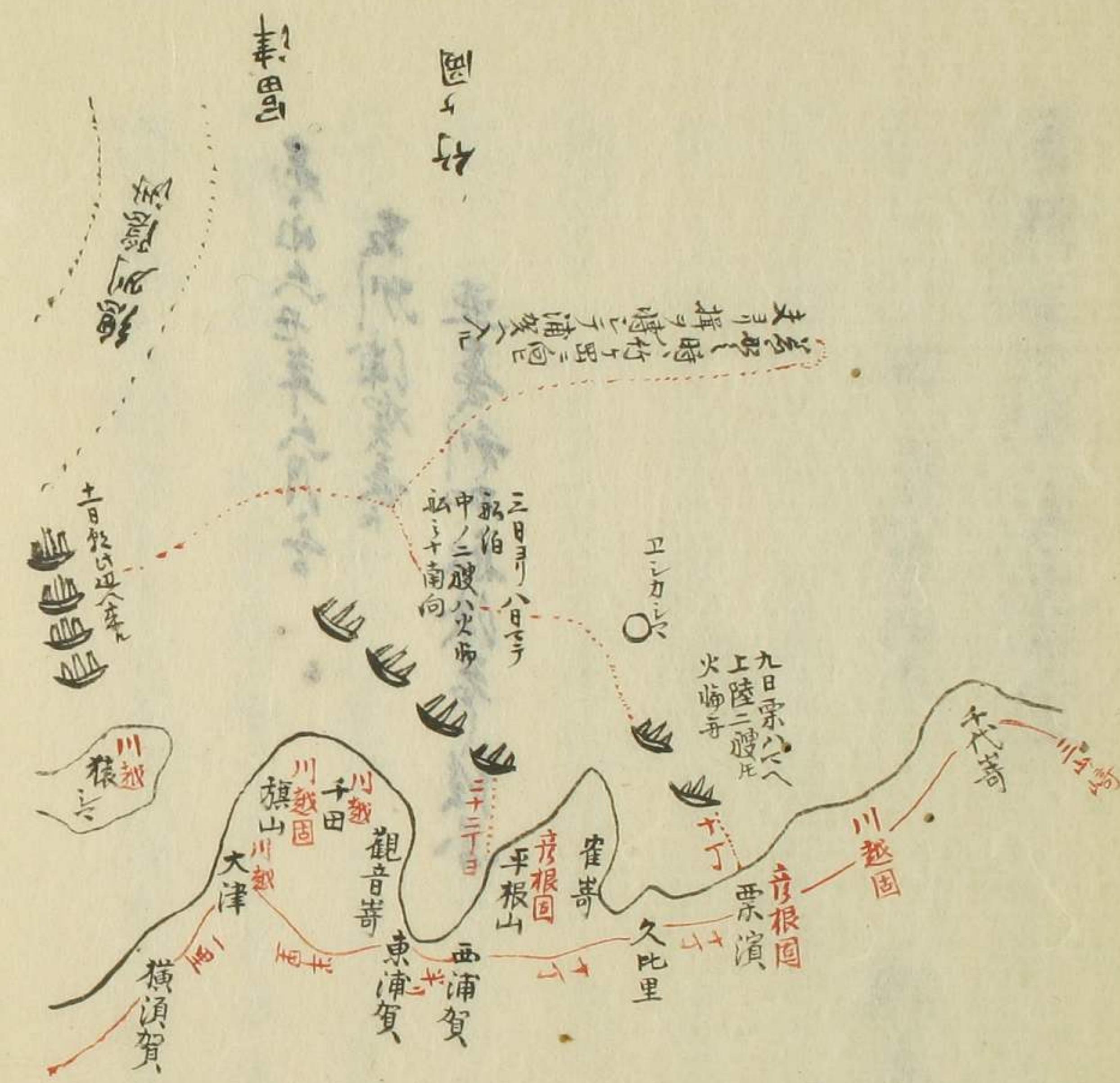
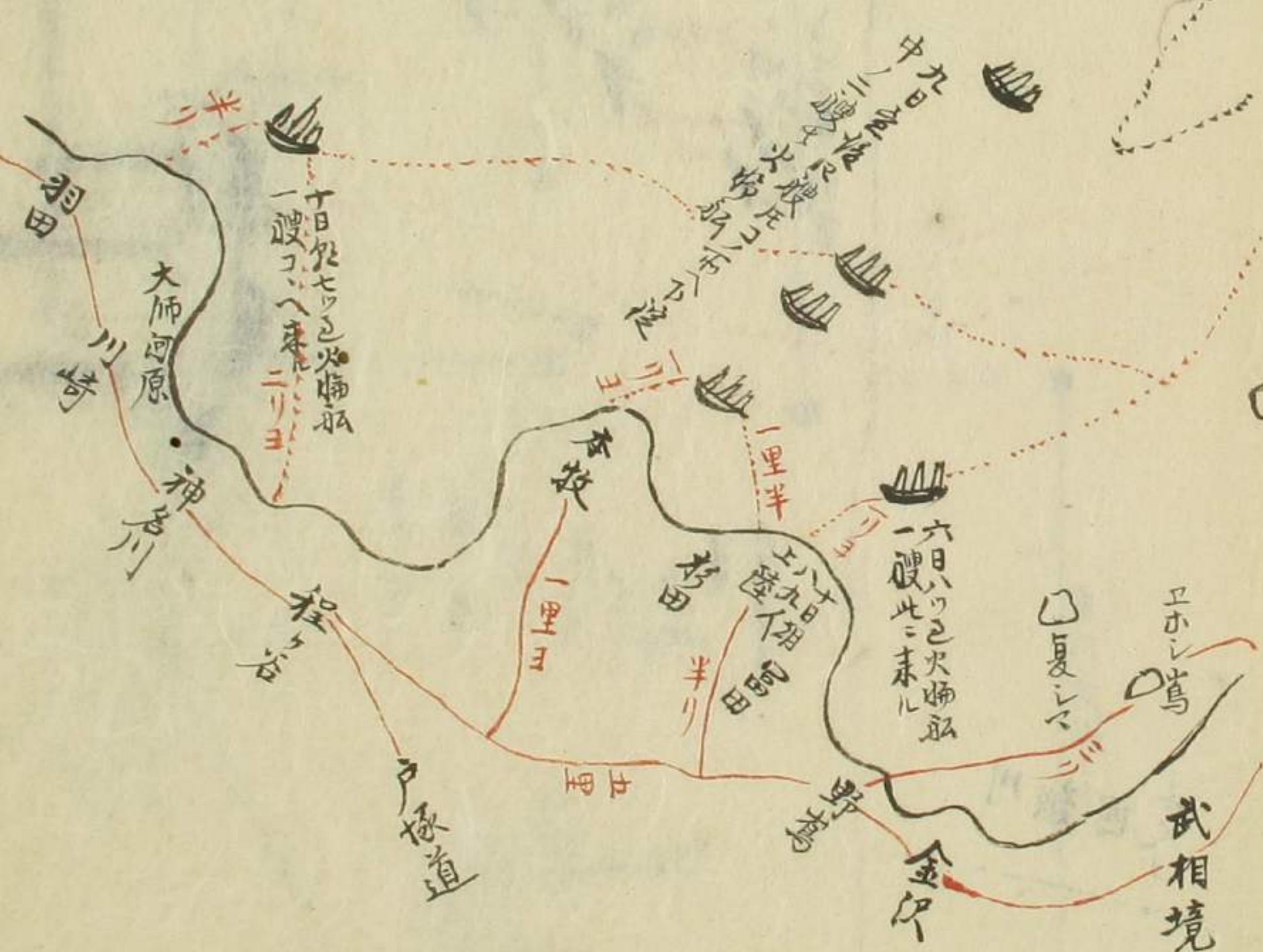
七月十六

叔平誠中

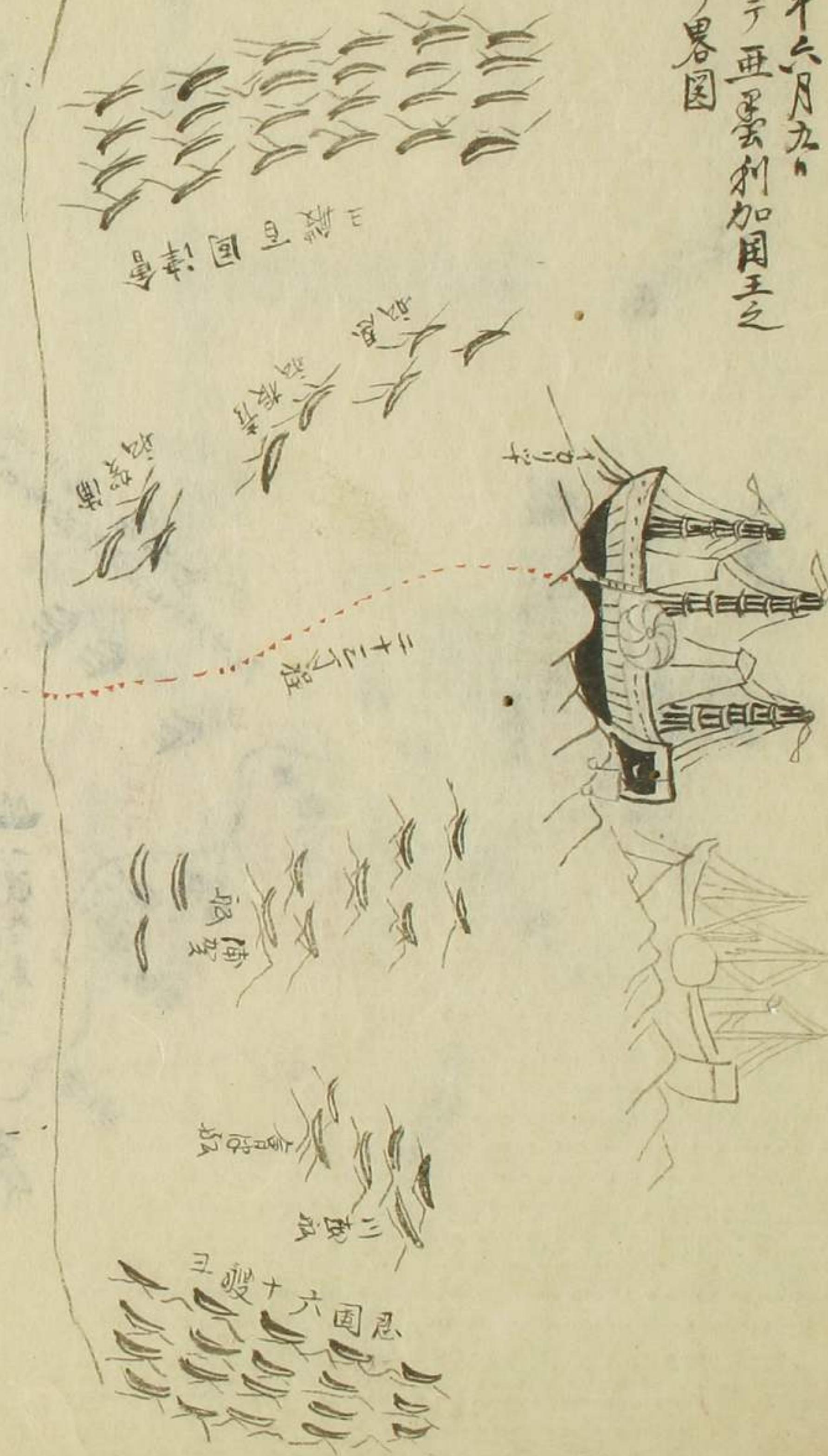
嘉慶六年六月十六

五洲浦發

亞墨利加叔平草稿

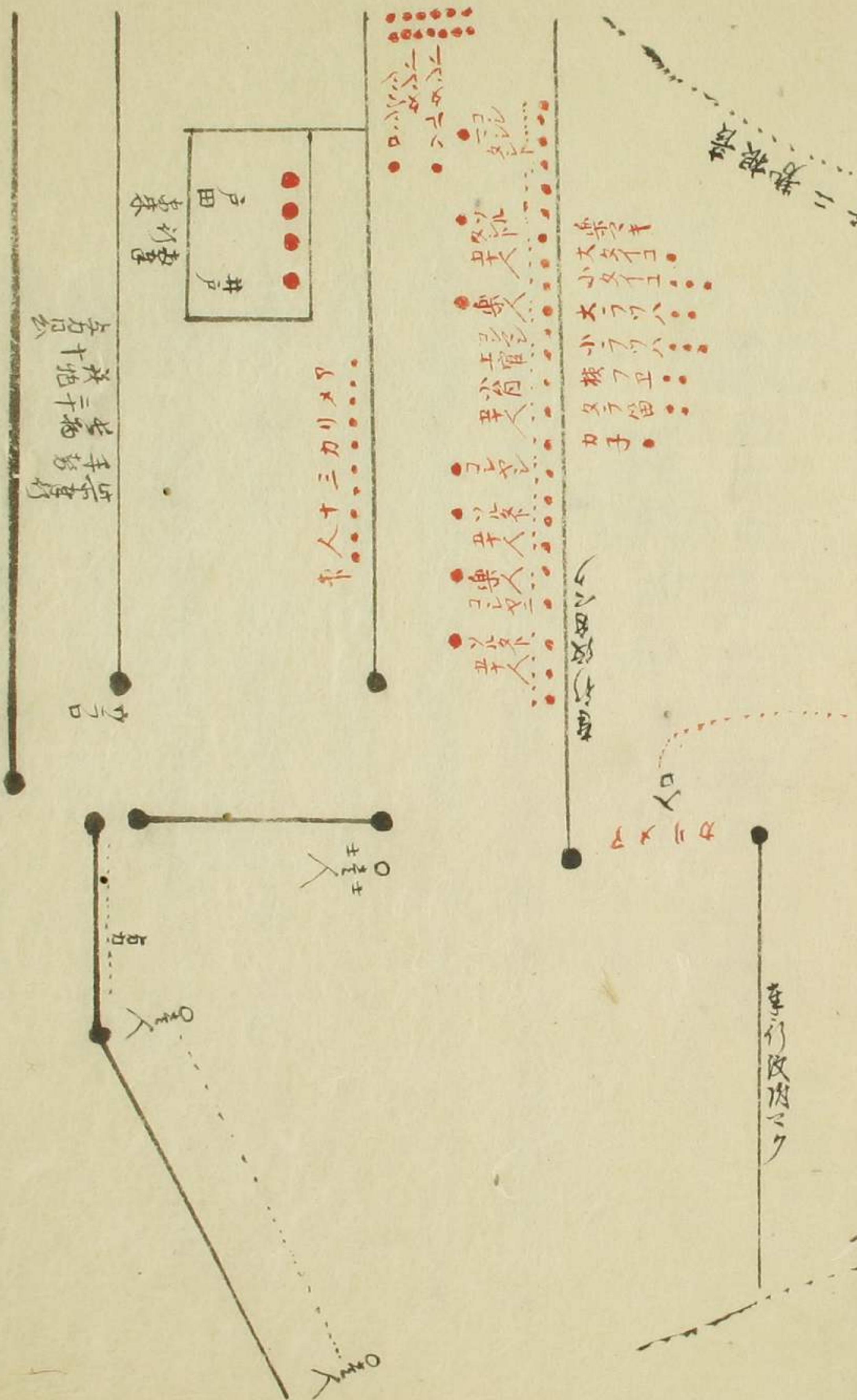


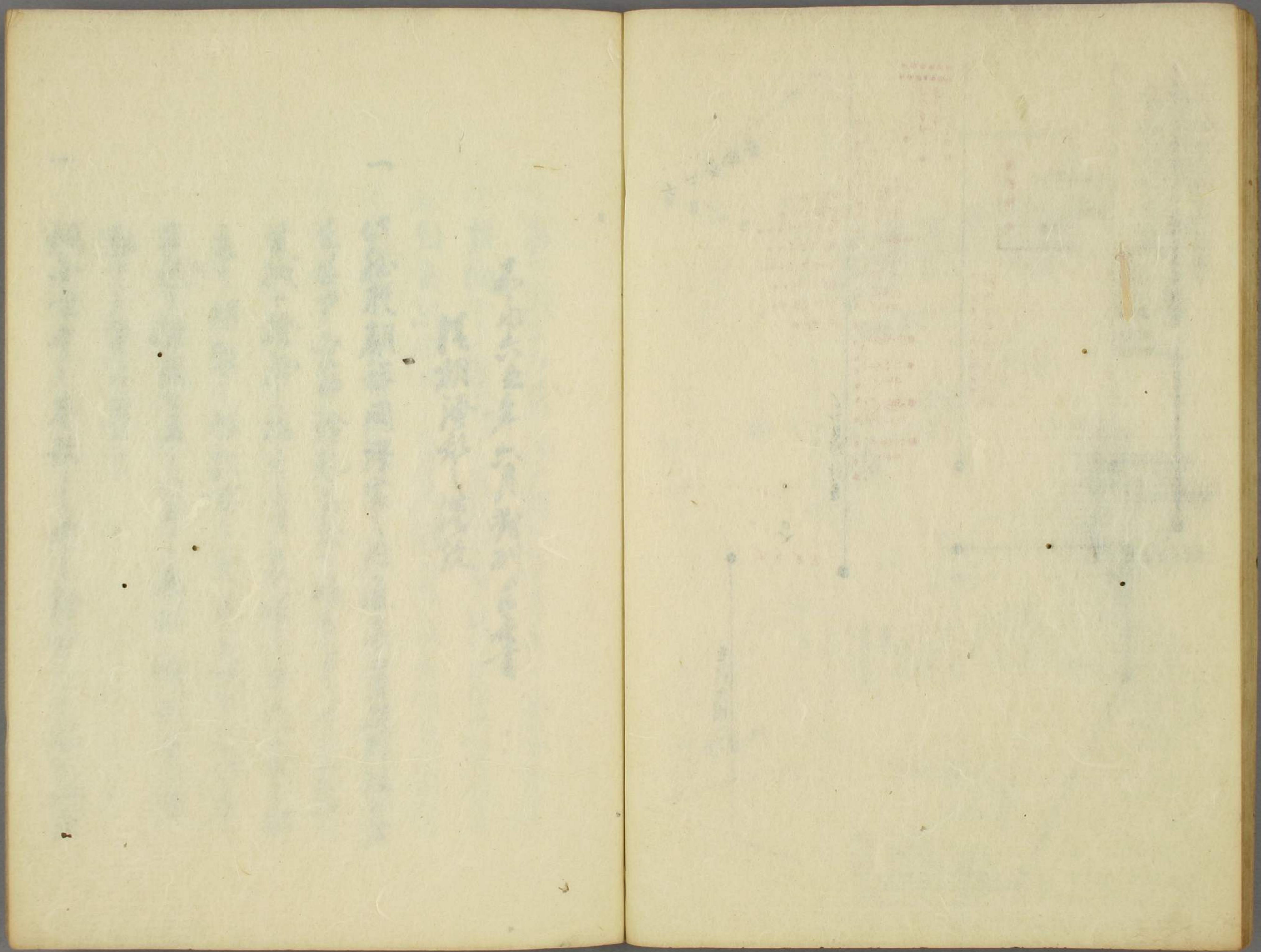
あかくま六七年六月九日
相州宗演ニテ亞里雲利加國王之
書稿の後取ノ畧圖



午日
E

卷之三





嘉慶六年六月對列公遺書

臣相澤私謹啟

一
以經於朝鮮圖譯官內通矣著及內治以者
至臣中止第澤私而後一昨年六月予宣初之
至誠一摺亦之極矣五更山氣虛之長夜五歲之根
之明無以得失而之民至古殘居非以之
之代之原復其名といひ一無別測別重之
起之立坐而處

一
彼不吸今之卷說之今之澤私之主深之宗殿

予往蒙召中而之淮海紅葉以蘿蔓之
繫一明湖以釀之復一以之為一於中更
貨財歸去祀之是不仍向人而忘民而作
妻以服後所泉列名列諸方之以秦
武昌九江安豐又福列以漢臨淮淮紅軍去
此傷多以之庶能旦小弟之於之小體以之
遠布一皮毛正解一之代諸方之軍之從從
使者往者多一不民國新制用之爰糧裕
濟仍多之第之之被減之子也、其集以疾久廢
又一設不一穰列以論之佐色而之食味幸

年國有聲之如是今之極多之以濟貧之深
莫之以皆之及濟勤名耕車之時紅葉在中
布之以胡鮮而之莫宜之役今大之以之復中、誠當
安君於計以復其被節是莫愛之役有以忌風
子之役車入而內植以自給行道之義小之主之難當
之役之安室之以宜先之成而以疾重於坐

六月

宋朝馬中台

石川將坐
佑治仲減

あつ水七宗年六月

行於伊都及北山

海防掛角井此系之川本山集

宋對馬守御策
佐須川將監

於朝鮮小字本子搜考之茲

五年八月以旅辭玉令臣道念別於中而北去越
水
欽
人
四
之
歸
日
雨
水
水
水

越後者多承以出其以被也。高麗及曰法也
北京去之。掠殺七八九萬人。明軍。攻之破
之。社法帝及答麻。沙。寧。左。援。右。軍。督。之。
以軍。之。哈。五。之。將。雙。方。軍。之。不。少。力。三。之。大。之。子。如。明。之。
去。糧。之。不。足。之。國。切。小。京。淳。沉。之。傷。之。射。解。之。云。
狼。之。乞。也。也。也。

禁軍大將軍三百人於北東門外力拒者云城主人亦
云七八八之或曰力拒之者以率東壁下之陣士張明
云占力拒之公居以許占者李也。公也。至淮之云難
立者有年以之為兵於上。一時之率東以爲庶不

寔發却人主才以與赤子使博門而歸入於赤子

一
般解曰平安道之內義則占而人有家財此
互被往來無松柏木之操者此是玄武縣於長安
院木松木以被郊野皇城之大建山大先秦第九
幽也之南也

一
北京六枝州而三佛門之南而汾康流也東
皇帝殺軍胡廟也京來坐食度在內漢在
之原宜乞金至之於夏之年明帝殺軍之
後漢平之後從仕以帝之向直後不直任居

以直以代之後之屬之般解也及和伐之
六州之任居之原之任

一
前之中立而每小承多福之通之處之謂之任
物之有罪解之多福之乞而或失之失之而之任
小對之多福之乞而換承小去夏旱換之中立而
入送之之室多之承及彩後如能中然以未去夏
旱解之候之可立而造立之如後之少承多福之
無之多矣之也而之也而之也而之也而之也

布之執胡解之原宜之任之大之任之大之任之

實居猶斗至暮少深尤是日夜之候未深
中內被以自然行遠一候也之謂也小之則之
為事之小而無害 而者為之大而無害則之

三月

宋齊子之志

右川方坐

絃須停滅



